



Title	【講演録】詩の声、唄の声：水俣、奄美、沖縄
Author(s)	渡邊, 英理
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2025, 7, p. 6-10
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100153">https://doi.org/10.18910/100153</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集1 第11回臨床哲学フォーラム共催イベント  
研究フォーラム：語り継ぐ、水俣と表現

## 【講演録】詩の声、唄の声——水俣、奄美、沖縄

渡邊 英理

こんにちは、大阪大学の渡邊英理と申します。柏木敏治さん、素敵な唄を本当にありがとうございます。ほんまなほ先生にCDをお借りして聞かせていただいたのですが、やっとライブで聞くことができました。感激の気持ちで一杯です。大阪大学は水俣とは遠く離れていますが、豊中に水俣の風や声がわたってくるような、そんな得難い時間を体験させていただきました。

こんなに素晴らしい時間を設けてくださったほんま先生や高橋綾先生、ゲストに来てくださった、相思社の小泉初恵さん、そして柏木さんに感謝申し上げたいと思います。2023年もまもなく終わりますが、今年、わたしの中で水俣の年、水俣病を考え、水俣を思う一年を過ごしてきました。ここにいらっしゃる方はご存じの方が多いと思うのですが、この秋、10月から11月にかけて「水俣・福岡展」が開催されました。これはコロナ禍で3年ほど延期されていたのですが、満を持して今年福岡アジア美術館で開催された催しです。私自身も、今年度前期は、演習の授業で石牟礼道子の『苦海浄土』を学生や院生たちと読んできました。その「水俣・福岡展」の会期の終わり近く、10月の末に西南学院大学で「石牟礼道子と水俣」というイベントがあり、『苦海浄土』をめぐる作家の町田康さん、石牟礼さんの評伝をお書きになっている米本浩二さんと私とで鼎談を行いました。

水俣をめぐるは本当にたくさんの言葉が紡がれ、思想や文学の言葉が積み重ねられてきました。その中で柏木さんの言葉は唄であり詩であることが大きな特徴だと思っています。そして、それは、水俣という特定の場所、土地の声をめぐって紡がれている。今日は、その唄であり、詩であるところの言葉について考えてみたい、それをまた特定の場所である奄美諸島と言われる群島、奄美の島々という場所に視座をおいて、お話してみたいと思います。

まず、取り上げたいのは、島唄です。島唄とは、一般名詞として沖縄奄美の島々にゆかりを持つ、ポピュラーソングという意味です。意外に思われるかもしれませんが、島唄は、実は1920年代の大阪で誕生しました。その時代に沖縄から大阪に移ってきて働いていた人たち、今も大阪には沖縄タウンがありますが、そこで暮らす人びとが、離れた故郷を思いながら、本土で出会った様々な音楽の要素をくみ取ってつくったのが、島唄だというふうに言われています。そして、島唄という言い方は、実は元々は奄美の言い方、奄美の言葉なのです。しかも、島唄の「シマ」は、アイランドの島ではない、もともとは集落、hoodという意味です。なぜ、集落の「シマ」か。奄美の島々はいずれも山深く、かつては集落と集落の間での行き来が難しく、ほとんど交流がありませんでした。ですから、奄美の歌は、その集落ごとに大きく異なっていて、唄を

聞けば、それがどの集落の唄かわかるほどだった。そういった集落の唄という意味が島唄にはあります。

それが沖縄の島々で唄われる島の意味になるのは、沖縄のラジオがきっかけです。沖縄のラジオ・ディレクターが沖縄・奄美で唄われている新しい伝統としてのポピュラーミュージックを指す言葉として「島」という言葉を使ってから今の意味を持つようになりました。

もう一つだけ付け加えます。先ほど水俣のことを考えるという話をしたのですが、鹿児島県の地図をご覧ください。〔鹿児島県の地図が表示される。〕先ほど、ほんま先生のお母さんが熊本出身だというふうにおっしゃっておられました。実は私自身も熊本生まれで、大阪で少しだけ過ごしたのですが、高校までは鹿児島県で育っています。小学校3年生まで過ごしたのが、鹿児島の北の方の宮崎県との県境にも近い霧島市というところでした。

霧島から少し北に行くと、大口というところがあって、伊佐市があります。ここがチッソの始まりの地です。曾木の滝という何段にもわたる大きな滝があり、チッソはそこに曾木発電所という水力発電所を作り、電力供給事業を始めたのですが、余った電力を使ってカーバイドの製造を目論見、水俣に進出して工場を作りました。私にとっては、水俣は隣町とは言いませんが、隣の隣の町といった距離感でした。

私が最初に『苦海浄土』を読んだのは中学校3年生の時でした。母親は熊本の人で、父親は鹿児島、母親は熊本から鹿児島に嫁いできました。家の中で話されるのは鹿児島弁です。鹿児島弁というのは、他の九州の地方の言葉と全然違うんですね。母親も鹿児島に嫁いできたので、一応鹿児島弁もどきをしゃべっていますが、実家の母親らと話したりするときは、熊本弁です。私はそれを見て、女の言葉というのはこのように家の中で抑圧されている、生まれ育った家を捨て、自分自身の言葉を捨てるのが、女性が大人になることなんだなということを思い知りました。それで、母親の言葉で書かれている言葉の本を読みたいと思い、探して読んだのが『苦海浄土』でした。

話を戻します。奄美の話をして。奄美諸島は鹿児島県に属しますが、地図を見ればわかるように、沖縄本島にもかなり近く、沖縄本島にほど近い島々をあわせた地域です。与論島からの旅の歴史を森崎和江さんがお書きになっていますが、福岡県の大牟田というところは、本当に多くの島の人たちが炭鉱労働のために移住した場所です。奄美とはそのように、沖縄にもほど近い、沖縄文化圏にずれながら重なり合う、重なり合いながらもずれている、そういった地域です。

例えば沖縄と奄美の島唄は、どちらも島唄と言いますが、異なる部分があります。唄い方でいえば、奄美の島唄は裏声で唄います。しかし、沖縄では裏声は邪道だとされていて、この点はとても大きな違いです。世界的にみても、裏声で唄うというのはわりと多いと思います。日本本土の唄も西洋の唄も裏声を使うものが多いですね。しかし、沖縄では裏声を使わない。中国の南のほうでも、同じように裏声を使わない唄い方をしますが、世界的には裏声を使わないのは少数派です。このように、沖縄の島唄を唄う唄者は、裏声を使わない。すると、裏声を使う歌謡曲のシーンで活躍するこ

とは少なくなります。対して、奄美では裏声を使うので、奄美の唄者から、ポピュラーミュージックのメジャーシーンで活躍する人は少なくありません。例えば、元ちとせや中孝介などが奄美の島唄からでてきた歌手です。

ここで、ひとつの映像をご覧いただこうと思います。某電気機器メーカーのCMですが、奄美の島唄が登場します。

(マクセルCM/映像/音楽)

島唄を唄う高校生の女の子が高校を卒業して島を出るという場面です。島と旅立ちという場面ですが、そこに島唄がある。おじいさんから孫娘に唄い伝えていた唄だったと思います。この場面では、家族の物語の中で使われているのですが、それを越えて、奄美では唄というものがすごく重要な文化として大切にされています。ここでの唄は、やはり記憶を伝える、語り伝えるという言葉に他なりません。とりわけ、奄美ではそうでした。というのも、奄美では、歴史を伝えるべき文字や文書が、奪われてしまったからです。奄美で最も過酷な時代と言われるのが薩摩藩の時代です。琉球による支配よりももっと過酷だったと言われています。経済的な収奪も大きかった。例えば、奄美大島でサトウキビを作ると、薩摩藩がごっそり持って行く。幕末・明治維新で薩摩藩が非常に大きく活躍できたのは、奄美という植民地からの収奪で生じた利益を独占していたからだと言われます。文化的な支配ももちろん行っていますが、ここで大事なのは、島民が家宝としていたような家系図とか古文書を没収し廃棄してしまったということです。これが何を意味するかというと、奄美の人びとの一人ひとりの個人や家の歴史や、あるいは地域に関わるような記憶や歴史というものを無いものにしよう、消し去ってしまおうということだったと思います。

こういったことがなされたわけですから、文字によって歴史を伝えていくことが極めて困難になってきます。では、なにが、記憶や歴史を伝えるのか。それは声による言葉です。声による言葉、とりわけ唄です。唄は、文字として残されない奄美の人々の苦しみや哀しみを伝える言葉としてある。奄美の島唄とは、文字によって書かれることがなかった、記憶や歴史を伝えるものです。だからこそ、唄は伝え続けねばならないし、伝え続けるものとしてある。島唄の中には例えば、いとくるぶしという、青島紬の紬をつくっているときの労働歌があります。それを女たちが集まって労働しながら伝えていく、あるいは男性たちの労働にもこういった形で伝えられてきた島唄があります。

ここで柏木さんの唄のお話しですが、水俣病の患者さんの声も、言うまでもなく、国家や権力者による歴史のなかでは十分な居場所を与えられてこなかった、声ならざる声です。そして、もちろん、その声を可視化するために、水俣病の歴史や水俣病闘争の歴史が書かれてきました。例えば、坂本しのぶさんは、水俣病の患者としてたくさん声や言葉を表しています。今年の春には、坂本さんのお話をお聞きする機会がありました。私は柏木さんの唄を、最初はCDで聞いて、今日も聞かせていただいて、それだけにはとどまらない、たくさん言葉を坂本しのぶさんが持っていたということに改めて知ることができましたし、それにふれることができたというふうに感じて

います。声自体もそうですし、声の感触のようなものも、柏木さんの唄は私たちに伝えてくれます。患者さんひとりひとりが持つ個別具体の声、その記憶を受け止める器として、柏木さんの歌を感じることができます。

先に進んで、もう一度柏木さんの唄について話したいと思いますが、少し補助線を引いてみたいと思います。もう一度、奄美の島唄の話に戻ります。奄美で最も島唄がつくられた時代は、実は米軍統治下の時代です。敗戦後は本土も占領されていましたが、奄美大島も占領下にありました。占領期間は1年だけ本土より長い。この時期に三界(みかい)稔と村田実夫が中心に行った新民謡運動があり、奄美の島唄の名作がつくられます。なぜこの時代にたくさんの島唄が作られたのか。実は、この時代は奄美に自立的な機運が満ち、文化的に勃興した時代だったからです。その意味で、この時代の文化を、「赤土ルネッサンス」と言います。ルネッサンス=文芸復興です。しかし、なぜ、この時期なのか。その理由を、たとえば、次のような小説の言葉が、ほのめかしています。「大人たちの多くは支配国への忌々しさをあらわにしていたが、私たち子どもは、『グンセイフ』という語感から異国の館を想像し、うっとりとして遠くを夢見るような顔になった。」

子どもたちがうっとりとして夢見る顔になったのはなぜかという点、「グンセイフ」は確かに、支配する国に他なりません。しかし、その支配は奄美がそれまで受けてきたものに比べたら、いささかのどかなものであったと言えます。例えば、沖縄と比べたらその違いははっきりしています。沖縄には、軍事的要衝として基地がおかれ、そこには、物々しい兵士たちが大勢駐留していたのですが、奄美はそうではなかった。同じ軍人でも、居たのは指揮官レベルの人たちであった。基地を置くには場所も悪く小さな島々で、軍事的な価値が小さいと判断されたために、政治的支配も沖縄に比べて弱かった。だからこそ沖縄が72年まで「返還」されなかったのに対して、奄美は1953年に日本に返還されるということになったわけです。逆説的ではあるが、米軍統治が、奄美ではそれまで縛られていた支配の呪縛というものを解き放つような役割を果たした部分があります。

奄美はヤマト世と呼ばれて、日本の支配下にありました。とりわけ、近世以来長く薩摩藩の支配下にあったのが奄美の地域です。しかも近代になっても、鹿児島本土から役人や教師がやってきて奄美を支配するということが続きます。通算するとおよそ335年もの長い間、薩摩藩それから鹿児島県の支配を受けていたということになります。結果として、アメリカの統治は、奄美に対する薩摩鹿児島島の支配、ヤマト世の「支配」の流れを断ち切り、逆説的に奄美に自立的な空間を作り出すこととなる。先ほども言った「赤土ルネッサンス」です。この時期に、本当にたくさんの島唄が作られたのです。その中の非常に有名な唄のひとつが、「ワイド節」です。「ワイド節」の「ワイド」というのは、闘牛で牛にかける声ですね。奄美は闘牛が盛んな地域で、特に徳之島ではみんな闘牛が好きなのです。ちょっとその唄を聞いてみたいと思います。

(曲/唄)

自然に手が動き、体が動き出す、そういったリズムがありますね。この唄はどんな

ふうにつくられたかという、これには証言が残っています。これはハンセン病の患者さんから頼まれてつくられた唄なのです。奄美和光園というところに入っていたハンセン病の患者さんが、大好きな闘牛の唄をつくってくれ、そう頼んでつくられた歌であるということです。闘牛の唄を聞きたいと、患者が願ったのは、その患者さんには闘牛を見るチャンスがなかったからです。ハンセン病の患者は、強制的に隔離され施設に収容されていました。隔離政策は1996年までずっと続き、またハンセン病の患者は、優生保護法によって、子どもをつくってはいけない、とされ、強制的に墮胎されたり、生殖機能が働かないように手術をされました。

患者たちは隔離施設にいて、近くでは闘牛をやっているのに、施設から出ることができない、闘牛のような人の多い場所に行くことはできませんでした。「ワイド節」はそういった状況に置かれながらも、闘牛を見たいという患者さんたちの切なる願いに応えるかたちでつくられた唄です。それが奄美を代表する島唄として長く愛されて、唄い継がれていくということになるわけです。ですからこれは、他者の声を含み込んだ唄というふうに言うことができると思います。

私が柏木さんの唄を聞いて思い出した唄のひとつが、この「ワイド節」でした。柏木さんの唄は、まさに水俣における「ワイド節」だと言えるのではないかと。患者がひとりひとり書いた詩、患者さんひとりひとりの声、あるいは、声にならざる声を掬いとりて生み出された、祈りと願いに満ちた、とても心に残る唄です。

このようにたくさんの唄がつくられていく。先ほどいろんな他者の声ということを行いました、たくさんの声にはいろんなレベルがあると思います。そして患者の声とその歌い手の柏木さんの声が重なっていく。と同時に、柏木さんがこのようにたくさん唄を唄ってくださる、唄としてつくり上げることで、患者さんの声の一つひとつが重なり合っていく。ひとつの声というのは、やはり儂いものなので、ひとつの唄だけだとなかなか可視化することが難しい。柏木さんの唄は、目に見えるようにするのが難しいことをも、唄によって表しているというふうに思います。たくさんの声が寄り集まることで、ようやく見えるようになる。その意味で本当に個別でありながらも集団的でもあり、普遍的でありながらも、単独的な、声にならざる声を私は柏木さんの唄に感じています。

(わたなべ・えり)